

## 《仁保の歴史》

古代から現在までの地域の形成過程を2000余字で読む。

### 1 仁保、じんぼ？ いえ、にほ。どこのこと？

現在、「仁保（にほ）」の地名は、概ね広島市南区にある広島市立仁保中学校区（仁保小学校区と黄金山小学校区）を指すものとして使用されています。おおざっぱに言うと、黄金山の東側半分の地域です。

黄金山は、江戸時代初頭（17世紀初頭）の干拓工事によって陸続きとなるまで、仁保島と呼ばれ、広島湾に浮かぶ島でした。

また、明治に入り、明治22年（1889年）に市町村制が施行され、仁保村（施行時時から昭和4年（1929年）まで）が設置されました。仁保村は、宇品島（現在の元宇品）や似島、峠島、金輪島等を含む、かなり広い村域を有する村でした。

昭和4年（1929年）、仁保村は、広島市に合併編入され、概ね現在の仁保中学校区を管轄区域とする仁保出張所が新たに設置されました。仁保出張所は、1980年（昭和55年）、広島市の政令指定都市移行に伴い廃止されましたが、仁保出張所の区域が現在の「仁保」をさす地名として定着していったものと考えられます。

ところで、かつて「仁保」の地名は、氏神様の「邇保姫神社」の島を意味する「邇保嶋」、あるいは、広島湾の当時の風景を表して命名されたと思われる「香（ニホウ）嶋」を起源としていると考えられてきました。近年、鎌倉期から室町期にかけて周防国吉敷郡（現在山口市）仁保庄の地頭であった三浦（平子）氏が島を領有していたことが分かり、三浦（平子）氏が室町期に名前を仁保氏に改姓していたことから、三浦（平子又は仁保）氏を起源とするとの説も出ています。

なお、邇保姫神社の氏神さまは、爾保都比売神（ニホツヒメノカミ）という神様で、丹生都比売神（ニウズヒメノカミ）と同じ神様であるといわれています。この神様は、水銀系赤色顔料の原料である朱砂の採掘や精製を司る神様であるとされ、その神様を祀る神社があることから、古代、仁保で朱砂の採掘が行われていた可能性が高いと考えられています。また、仁保の地名は、朱砂の採掘を行っていた場所の地名の一つであることから、周防国仁保庄も古代には朱砂の採掘が行われていたと考えられます。

周防国仁保庄の仁保（三浦又は平子）氏が安芸国邇保嶋の領主となり、邇保嶋が仁保島となったとすれば、偶然とはいえ、不思議な縁を感じます。

## 2 島から陸へ

仁保島は、干拓により陸続きとなりましたが、造成された干拓地は、現在、段原、東雲、霞、出汐、旭、皆実と呼ばれています。この中で、仁保と最も関係深い地域は、東雲です。現在の仁保小学校の周辺、仁保新町1丁目、2丁目は、もともと干拓地であったところです。仁保村発足時には、広島市の区域で、町名も昭和40年（1965年）代初めころまで東雲町でした。

さて、干拓に伴い東雲と大州に堤防が築造され、太田側の支流としての水路ができました。これが猿候川です。干拓地への給排水は、猿候川を利用して行われました。しかし、農業用水は、太田側から流下してくる真水に、潮の満ち引きによる瀬戸内海の海水が混じるものであったため、稲作には適さず、東雲の干拓地の多くは蓮田として利用されました。今から半世紀前、1960年（昭和35年）ころまでは、仁保小学校から広島大学付属東雲小・中学校の周辺には広範に蓮田が広がっていました。

## 3 湊崎港の埋め立て

東雲の干拓により人工的に作られた湾が漁港として整備された港湾が湊崎港であり、長く仁保の産業の中心的役割を果たしてきました。

しかし、第二次世界大戦中に陸軍船舶部により、湊崎港の概ね4分の3と湊崎地先（現在の仁保1丁目～4丁目）の埋め立てが行われ、軍用地として整備されました。これにより湊崎港は、現在の広島銀行仁保支店の前からマツダ湊崎工場まで水路のような形状となりましたが、漁港としての機能はわずかに残りました。

終戦後、陸軍による埋立地の多くは、昭和20年（1945年）代前半、道路・公園等の公共用地を除き、いったん地域住民に払い下げられましたが、昭和20年代後半に、国、東洋工業（現マツダ）が住民から取得し、国道、公園、工場等が整備されました。また、わずかに機能を残していた湊崎港も昭和30年（1955年）代後半に埋め立てられ、仁保保育園移転用地や電電公社電話交換所、東洋工業教育センター用地等として利用されました。当時の堤防の跡が広島銀行仁保支店の前からマツダ教育センターまでの直線の道路として残っています。

## 4 黄金山の開発

かつて仁保島の陸地の大部分を占めていた黄金山は、畑作（野菜、麦等）や

燃料である木端や枝の採取場として利用されてきました。室町時代には黄金山に城が築かれ、広島湾防衛の拠点として重要な役割を果たしていましたが、江戸時代に入り、廃城とされました。現在では、二の丸の石垣跡を中国放送のテレビ塔跡付近に見ることができます。

戦後、黄金山の山頂にテレビ塔が建設されることになり、昭和30年（1955年）ころから自動車用登山道の整備が行われました。昭和40年（1965年）代には、広島市の夜景の名所となり、広島テレビのテレビ塔屋舎には、展望レストランが設けられていました。

山頂に設置された中国放送、広島テレビのテレビ塔と中継所は、平成23年（2011年）のデジタル放送の開始とともに、その機能を失いました。

また、自動車用登山道の整備により、昭和30年（1955年）ころから、広島市の住宅供給の場として、黄金山の麓から中腹にかけて、多くの住宅団地が開発されました。この公共負担用地を利用して、昭和51年（1976年）に仁保中学校（仁保1丁目）が、昭和52年（1977年）には黄金山小学校（住所は西本浦ではなく北大河町）が開校しました。

団地開発は、自動車登山道周辺（現在の黄金山町）から始まり、勾配の小さい黄金山西側の西本浦、東側の旭ヶ丘（現在仁保1丁目）、ニュー旭ヶ丘（現在仁保2、3丁目）、仁保南と順次進められました。